

2025～2026 年度

## 平和スタディツアーを企画しよう！

法政アクティブリサーチ 寺川クラス 2組

大村	旭陽
榊井	勇希
青木	沙奈
内山	光惺
安原	史騎
大塚	麻生
矢野	達也
嶽元	颯太
佐藤	遥
村上	浩輝
今井	祐次

## 《 目次 》

はじめに

第1章 平和スタディツアーの企画

第2章 行き先を東京に決定したことの理由と経緯

I 予算面

II 東京大空襲・戦災資料センターを調査対象として訪問先に決定した理由

(1) 訪問先の選定

(2) 訪問先決定後の準備

(3) 質問項目の検討

第3章 平和スタディツアーへ

I 旅程の検討

II 東京大空襲・戦災資料センターへ

(1) 東京大空襲・戦災資料センターまでの道のり

(2) 映像資料の視聴

(3) 体験者の方のお話

(4) 東京大空襲・戦災資料センターの館内を見て回る

(5) 自由時間

III 東京大空襲・戦災資料センターをあとにして

おわりに

## はじめに

もし自分が暮らしている町が一夜にして焼け野原になったら、あなたは何を思うだろうか。私たちが当たり前のように過ごしている日常は戦争によって簡単に失われてしまう。

終戦から 80 年が経過した現在、平和について考える機会が少なくなっているように感じる。戦争を実際に体験した人の数が年々減少していることや、戦争体験者の高齢化が進んでいることから、戦争の記憶や体験を直接聞く機会も少なくなってきた。戦争の記憶をどのように後世へ伝えていくかを考えることが喫緊の課題だ。

戦争が人々の生活にどのような影響を与えたのかを知るとともに、私たちのような若い世代が平和の大切さや自分たちに何ができるのかを考え、その思いを次の世代へと受け継いでいくことを目的として、平和スタディツアーは組まれる。誰もが平和について考えるきっかけとなるようなものを考えてみたい。多くの人が平和について考えることができるツアーづくりにクラス全員で取り組み、実際にクラス全員でツアーを実行した。歴史のバトンを若い私たちがどう受け取り、未来へどうつないでいくべきなのか。この問いに対する危機感と責任感が、今回の取り組みの原動力となっている。戦争を起こさないために私たちに何ができるのか。そのためには過去の出来事を知り、平和について考えることが重要である。今回私たちが企画するのは、若い世代が戦争や平和に関わる施設を直接訪問し、現地での体験を通して戦争の悲惨さと平和の尊さについて改めて考えることを目的とした平和スタディツアーである。

本報告では、まず私たちがそれぞれ考案したツアーのアイデアを整理し、なぜ最終的に訪問先を「東京」に決めたのか、そのプロセスを振り返る。さらに、実際に足を運んだ東京大空襲・戦災資料センターで何を感じ、何を学んだのかを深く掘り下げるとともに、これからの平和学習がどうあるべきか、私たちなりの具体的なアプローチを考えたい。戦争は教科書の中だけの遠い話ではなく、私たちのすぐそばにある。平和学習は子どもの頃の修学旅行で学ぶことができればそれで十分というわけではない。大人たちこそその場所へ行ってみよう。

「行きたいけど、きっかけがなかった」そう思っているあなたに、その一歩を踏み出してほしい。広島、長崎、沖縄だけではない。この国のいたるところに、忘れられたくない戦争にまつわる場所がある。

その日東京は静かな夜だった。多くの人がいつもと変わらない明日を迎えるはずだった。しかし、その夜空は炎に染まり、多くの人々の日常が奪われた。東京大空襲である。

## 第1章 平和スタディツアーの企画

私たちが当初提案したスタディツアーの企画は次の7件である。<sup>1</sup>

	行き先	訪問先	特徴や特色
1	兵庫県加西市 神戸市	鶴野（うずらの）飛行場跡 戦没した船と海員の資料館	特攻隊白鷺隊の飛行訓練 戦没した船の写真展示
2	愛知県名古屋市	愛知・名古屋戦争資料館 愛知平和記念館 ピースあいち	市民から寄せられた実物資料・写真・日記など
3	東京都江東区	東京大空襲・戦災資料センター 東京都復興記念館	東京大空襲 遺書や遺品
4	兵庫県加西市 姫路市	鶴野飛行場跡 姫路市平和資料館	特攻隊白鷺隊の飛行訓練 軍事工場や軍事施設

<sup>1</sup> それぞれの訪問先の特色や学べる内容は、各ウェブサイトおよびデジタル配信記事などを参考に記述している。その一つひとつを注記することは、紙幅の関係上、省略した。関係各所におかれてはご寛恕たまわりたい。

5	愛知県豊川市 半田市	豊川海軍工廠の遺構 半田赤レンガ建物 愛知・名古屋戦争資料館	軍需生産における労働者 軍需品保管庫への転用 市民の視点からの戦争
6	東京都江東区	東京大空襲・戦災資料センター	東京大空襲 遺書や遺品
7	愛知県名古屋市 春日井市	ピースあいち 千種公園民間戦災被害者の碑 鳥居松製造所慰霊碑 愛知・名古屋戦争史料館	戦時の写真や遺物の展示 陸軍造兵廠製造所跡地 空襲慰霊碑 市民から寄せられた実物資料・写真・日記など

### 1 鵜野飛行場跡と戦没した船と海員の資料館

鵜野飛行場はパイロットを養成するために作られた訓練施設である。戦う技術や戦闘機の乗り方を知らない人たちが戦争で戦う術を身に付ける、現代の私たちでは考えることができないことだ。今私たちと同世代、それより下の代がここで努力してきたことを学ぶことで、平和の大切さについて改めて考える。

①鵜野飛行場滑走路跡地は、第二次世界大戦中に旧日本海軍が設立した飛行場で全長約1200mmのコンクリート製滑走路の跡地で、当時は戦闘機の訓練や整備、特攻隊の準備などに使われた。今もほぼ当時のまま残っている。②鵜野飛行場資料館では実物大の九七式艦上攻撃機や紫電改模型を展示しており、当時の写真、特攻隊員の手紙や遺書、服、地図、模型なども見ることができる。地元の保存活動と加西市による公的な整備計画によって現在もそのままの姿で存在し、今では平和学習施設として活用されている。特攻隊の訓練基地だったため、若者たちがどんな思いで戦争に向かったのか学ぶことができる。兵庫県に行くのであれば、③戦没した船と海員の資料館も訪問したい。同資料館では太平洋戦争時に戦没した民間船1000隻超の写真などがパネル展示されているほか、戦没した船から回収されたものなども展示されている。

### 2 名古屋の戦争記念館

第二次世界大戦の末期、名古屋の街は激しい空襲を受けた。そこには子どもたちを含む多くの市民が暮らしており多くの命が奪われた。「戦争」という言葉を聞くと、多くの人は戦場や兵士を思い浮かべるかもしれない。しかし実際には戦争は前線だけで起こるものではなく、地域の中に生きる一人ひとりの暮らしの中に深く入り込んでいた。このことについて詳しく知ることができる場所が名古屋には三か所ある。

①愛知・名古屋 戦争に関する資料館では県民・市民の方々から寄せられた戦争に関する実物資料や写真、日記などが展示されている。県民の戦争体験などを通して、戦争が地域の人々にどのような影響を与えたのか、また当時の悲惨さを細かく知ることができるようになっているという。②愛知平和記念館では千人針、防毒マスク、手りゅう弾、軍服、鉄カブトなどの戦争資料が展示されている。戦争に関わった軍人、兵士などやその影響を地域・個人の視点から知ることができる。③戦争と平和の資料館「ピースあいち」には市民の寄贈を中心に約5400点の戦時資料がある。第二次世界大戦中の人々の暮らしや空襲の被害、戦時下の子供たちの様子などを、写真・手紙・日記・実物資料などを通して紹介している。これらの資料館はいずれも地域と戦争のつながりを学ぶことができ、国全体の歴史として語られる戦争も、実際には地域ごとに異なる体験と記録があることが分かる。戦争による日常生活の破壊は自分が住んでいる地域で起きているのだ。

### 3 東京大空襲

東京大空襲は中学などの教科書で学ぶ機会があるが、関西に住んでいるとふだんから意識することはない。東京での訪問先候補として次の2か所を提案する。

①東京大空襲・戦災資料センターでは東京大空襲を含む東京が戦争中に受けた空襲を中心に戦災のようすを地図や焼夷弾の模型、映像資料の展示により学ぶことができる。また、大空襲の体験者による証言を聞くこともできる。②東京都復興記念館は関東大震災の被害と復

興を記録する施設として設立されたが、戦時中の空襲や戦災についても展示されている。とくに、空襲を受けた戦災地の復興についても知ることができる。同記念館が所在する都立横綱町公園の中には東京都慰霊碑などの碑もある。

#### 4 鶉野飛行場跡と姫路市平和資料館

兵庫県が経験した戦争のうち、特攻隊の育成という「攻めの歴史」と空襲から市民を守る「守りの歴史」の2つの側面を学ぶ。

①鶉野飛行場跡は、第二次世界大戦が激化し始めた頃にできたパイロット養成を目的とした旧日本海軍の飛行場である。特攻隊「白鷺隊」（はくろたい）がこの場所で飛行訓練をしており、近くの工場では戦闘機の組み立ても行われていた。鶉野飛行場跡には「sora かさい」というミュージアムが存在する。ここでは、技術ゾーンと歴史ゾーンに分かれており、技術ゾーンでは局地戦闘機「紫電改」や、特攻作戦に使用された「九七式艦上攻撃機」の実物大模型を展示している。歴史ゾーンでは鶉野飛行場建設開始から終戦までを、時間軸に沿ったストーリー映像で紹介している。また、戦争の継承を目的とし、戦争体験者の証言映像も展示している。また、近くにある巨大防空壕では、特攻隊員の遺書などを紹介する約20分の映像が上映されている。毎土日祝は一般開放されており、平日は鶉野観光ガイドツアーに参加することによって鑑賞可能である。②兵庫県姫路市には、鶉野飛行場で組み立てられていた戦闘機（紫電改）の部品を製造していた工場をはじめとする、軍事工場や軍事施設が多くあった。しかし、1945年の姫路空襲により軍事施設は壊滅し、地域住民にも多くの死傷者を出した。姫路市平和資料館ではその当時のようすを展示などで学ぶことができる。姫路市平和資料館は姫路駅からJR線や山陽鉄道でそれぞれ一駅が最寄り駅である。とくにJR手柄山平和公園駅は最近できた新しい駅でアクセスが便利になっている。

#### 5 愛知県の戦争遺構と愛知・名古屋戦争資料館

日本の近代化と軍需産業の発展は切り離すことのできない深い関係がある。戦後の日本国憲法の時代になり、軍需産業の多くは、軍需に応じるものではない通常の製造業に転換され、高度経済成長を支えることとなったが（もともと、たとえば朝鮮戦争時における日本国内での武器製造など軍需への対応がまったく無くなったわけではない）、もとをたどれば、軍需生産に端を発するものが少なくない。特に愛知県は、航空機や艦船用機銃、車両等の生産を担う軍需工場が数多く集積していた地域である。製造業の視点から戦争を見ることで、戦時下での市民生活や動員された若者の実態を知ることができ、平和な社会を維持するために必要な産業のあり方を探ることができるのではないかと考えられる。産業と戦争の関係を学ぶツアーであり、次の3か所を訪問する。

①豊川海軍工廠の遺構を見学し、軍需生産に従事した人々の労働実態と空襲による犠牲の重さを認識する。豊川海軍工廠平和公園は、かつて東洋一の兵器工場と言われた場所であり、広大な敷地に数万人規模の労働者が兵器製造に従事していた歴史があるという。しかし空襲被害により学徒動員された多くの若者が亡くなっている。②半田赤レンガ建物のような産業遺産に見られる戦争の痕跡を確認し、日常の風景の中に潜む戦争を実感する。この建物はビール製造工場だったが戦時中に軍需品保管庫へと転用された経緯がある。民生品の製造から軍需品の保管へと役割を変えた歴史を学ぶことができる。建物外壁には米軍機による機銃掃射の痕跡があるらしく、軍需産業の拠点が攻撃対象となるという事実を知ることができるだろう。③愛知・名古屋戦争資料館は、軍需産業の中心地として壊滅的な被害を受けた名古屋市の歩みを記録している。ここでは市民の視点から描かれた体験や、実際に発見された250キロ不発弾などが展示されており、一つひとつの戦跡を巡った後に、資料館で大まかな歴史の流れを捉えることの意味は大きいと考えられる。この3か所をめぐるツアーは、産業というフィルターを通して戦争を構造的に捉える試みである。特に私たちと同年代の学生が学徒動員として兵器生産に従事し、そこで命を落とした事実は、現代の学生にとって強い共感を持って迎えられるはずである。また、軍需産業が集積した地域が受けた被害を学ぶことは、現代の国際情勢における産業と安全保障の関係を考える上でも重要な地となると考えられる。

#### 6 東京大空襲・戦災資料センター

広島や長崎の原子爆弾投下は国内外で広く知られている一方で、東京大空襲については同

様の規模の被害を受けたにもかかわらず、その実態が十分に理解されているとは言い難い。実際、東京大空襲では一夜にして約10万人もの命が失われ、多くの市街地が焼失した。短時間で発生した都市への被害としては歴史的にも非常に大きなものである。きわめて多くの死者を出しながらその認知度や教育現場での扱いは原爆に比べて低い傾向にある。このような背景から、私たちは東京大空襲について主体的に学ぶ意義が大きいと考えた。そこで訪問先として選んだのが東京大空襲・戦災資料センターである。この施設は、東京大空襲の被害の実態や当時の人々の生活、戦争が市民に与えた影響などを具体的に知ることができる貴重な場所である。特に、実際の体験者の証言や当時の資料、写真などを通して、単なる歴史的事実としてではなく、「人々の生活の中で起きた出来事」として戦争を捉えることができる点に大きな意味があると考えられる。大空襲によって多くの人々が犠牲になったという事実を知ることが、平和について考える上で重要である。現在の平和な生活は過去の犠牲の上に成り立っている。

## 7 愛知県の戦争遺跡と資料館

現在私たちは世界大戦のような戦争もなく、いつ来るかわからない空襲や一般人が戦地に出兵されるといった恐怖に脅かされていることもなく、平和に自分たちの生活を送ることができている。しかし、戦時中はそうではなかった。日常生活はどうだったのか。戦争の悲惨さやもう二度と起こしてはいけないことを再確認するためにも、戦争遺跡や資料館を訪問することは大切である。資料館では、当時の愛知県下の空襲や戦争はなぜ起きたのかなどといった出来事を当時の写真や遺物などを展示して戦争の惨劇を振り返ることが出来る。

①戦争と平和の資料館「ピースあいち」では、愛知県下の空襲や戦争はなぜ起きたのかなどといった出来事を当時の写真や遺物などを展示することで学ぶことができる。また、戦争の教訓を伝え、市民の平和へのメッセージを広め、そしてその思いと教育を次の世代へと継承していく重要な役割を果たす施設であるという。②名古屋市の中心部にある千種公園には民間戦災被害者の碑がある。名古屋陸軍造兵廠千種製造所という機関銃などの兵器を作っていた工場があった場所である、名古屋空襲の最に爆撃を受け、多くの犠牲者を出した。爆撃の痕跡として千種製造所の外壁が多く残っているなどの戦争の跡地となっている。③鳥居松製造所への空襲で死亡した方の慰霊碑が春日井市に建っている。④愛知・名古屋 戦争に関する資料館は、県民から寄せられた戦争に関する実物資料を展示する。

## 第2章 行き先を東京に決定したことの理由と経緯

### I 予算面

第1章で挙げた7か所のうち企画対象とする1か所を決定するにあたり、予算面については次の諸点を考慮した。

- ・若い世代とくに大学生が訪問することを想定しているため、高額にならないようにする。
- ・ツアー日数は1泊2日とする。
- ・東京までの往復や現地の移動はいずれも公共交通機関を利用する。
- ・新幹線は指定席を予約する。
- ・宿泊施設は立地や信頼性を重視しそのために最安の施設でなくともかまわない。

株式会社リクルートが発表している「じゃらん観光国内宿泊旅行調査2025」（じゃらん「とーりまかし」vol.81, 2025年9月号）によれば、2024年度（2024年4月～2025年3月）における「宿泊旅行実施者の1回の旅行当たり平均宿泊数」は18～29歳男性が1.79泊、18～29歳女性が1.68泊となっている。また、「1回の国内宿泊旅行にかけられた費用」は、18～29歳男性が総額64,400円（内訳は宿+交通費32,500円、現地消費31,900円）、18～29歳女性が総額61,800円（内訳は宿+交通費33,100円、現地消費28,700円）である。<sup>2</sup>1泊2日の国内旅行の場合、18～29歳の男女とも、宿泊費と交通費を合わせて

<sup>2</sup> 株式会社リクルート ウェブサイト <https://jrc.jalan.net/wp->

33,000 円前後であることから、法政アクティブリサーチの交通費補助が1人あたり32,000円であることについて合理的な金額であることが分かる。もっとも、新幹線指定席で京阪神地区から東京へ往復すると、新幹線代金だけで京都～東京間28,340円、新大阪～東京間29,440円、新神戸～東京間30,980円であり、行き先によっては宿泊する場合、受講生の自己負担金が必要となる。

なお、この調査は「観光などを目的とした宿泊を伴う国内旅行（出張・帰省・修学旅行などを除く）」の実態を調べたものであることから、現地消費のうち観光施設への入場料などが比較的大きなウェイトを占めているのではないかと想像できる。平和スタディツアーの場合、訪問先施設への入場料（施設維持費など別名目の場合もあるがそのような場合も「入場料」とする）は比較的安価であることが多く、入場無料のところもある。そうすると、現地費用として必要なものは施設入場料と食事代であり合わせて4,000円もあれば十分であろう。

以上のことから、1泊2日の場合、交通費+宿泊費33,000円、現地消費4,000円、計37,000円が目安となる。

## II 東京大空襲・戦災資料センターを調査対象として訪問先に決定した理由

### (1) 訪問先の選定

第1章で紹介したように、当クラスの訪問先候補は7か所である。授業のなかで、受講生全員がプレゼンテーションを行い、訪問先を1か所に絞った。プレゼンテーションはまず企画案（一次案）を発表し、それに対する担当教員からのコメントに基づき、次回授業時に企画案（二次案）を発表した。そのうえで、それぞれの特色や平和学習の意義などについて検討し、受講生全員で話し合った結果、東京都江東区所在の東京大空襲・戦災資料センターを訪問先とすることに決定した。

当初1泊2日でのスケジュールを検討したが、東京都内宿泊施設の宿泊費用が高騰しており、もっとも安価なビジネスホテルでも1泊18,000円程度であることが判明した。そのため、大阪・京都～東京間の新幹線指定席往復料金が約30,000円であることから、新幹線にかかる交通費と宿泊を合わせると48,000円程度になる。これは、大学生など若い年代にとって、1泊2日の旅程にしては高額であると考えられるため、現地訪問の約1か月前に、日帰りでの訪問に変更することを検討した。受講生の意向を確認したところ、東京大空襲・戦災資料センターに行くことができるのであれば日帰りでも対応可であるとの意見が大半を占めたため、日帰りで訪問することとした。

日帰りとなったことで、早朝に各自の自宅を出発し東京駅には午前10時30分に集合することになった。また、1泊2日であれば、東京大空襲・戦災資料センターへは2日に訪問し、1日目に例えば靖国神社や同神社遊就館、上野動物園慰霊碑などを見て回ることも考えていたが、同センター以外への訪問はいずれも不可能となった。費用面の都合とはいえやや残念であったことを記さなければならない。

東京大空襲・戦災資料センターを訪問先として決定したのは、おもに次の理由による。

- ・東京大空襲は短時間に多くの人々の命を奪ったものであり（長崎での原爆死者数よりも多い）首都への攻撃であることもさることながら、そこに暮らす人々の生活が深夜のわずかな数時間のうちに奪われたという結果の重大さを知ることは、戦争の悲惨さを実感するうえで必須である。
- ・資料センターは民設民営で運営されており、入館料と寄付で戦争の記憶を伝承しているという特徴がある。
- ・大空襲を実際に体験した方からのお話を直接聞くことができる。

このように、今回の平和スタディツアーにおいて、私たちは7か所の行き先候補の中から東京の東京大空襲・戦災資料センターを選択した。決定に際しては、今述べたように、平和学習としての訪問先のなかでも特徴的な諸点があったこと、ならびに、予算面と若い世代である私たちが実際に訪れることができる地理的な条件も考慮している。新幹線を利用し、日

帰りでも往復可能な（多少朝早起きする必要があるが）場所で無理なく訪問できる場所であると判断した。<sup>3</sup>

また、最終的な行き先は私たち全員で話し合っ決定した。決定する際は、単に興味や希望だけでなく、金銭面の負担、かかる日数、移動手段などの現実的な要素も検討材料とされた。東京大空襲・戦災資料センターを調査対象として選んだ理由は、今述べたように、大空襲での死者の多さ、施設の運営形態、空襲体験者によるお話を聞くことができることを重視したことによる。そして、私たちと同年代の若者に、大空襲のことをぜひ知ってもらいたい、資料センターをぜひ訪問してほしいという願いもあり、上記のような経緯で、私たちは、東京へ、東京大空襲・戦災資料センターへの訪問を最終的に決定した。

## （2）訪問先決定後の準備

東京大空襲・戦災資料センターへの訪問を決定した後、法政アクティブリサーチの授業の一環としての訪問、当クラスが調査する内容とその目的を簡潔にまとめた訪問依頼文を作成し、資料センター所定の書式に必要事項を記入のうえ、<sup>4</sup>あわせてファックスで送信した。空襲体験者のお話をうかがうことや、展示見学の際にガイドをお願いすることも含めて、団体予約をした（「空襲体験者のお話」については後述する）。入館および講和予約の日時確定の返信メールが届き、第1グループ（9名）が2026年3月7日（土）13時00分に、第2グループ（5名）が3月19日（木）13時00分に、それぞれ東京大空襲・戦災資料センターを訪問することが決まった。

---

<sup>3</sup> 1泊2日から日帰りに変更したことについて、宿泊施設における宿泊費用の高騰が一番大きな理由である。また、数か月前に往復の新幹線と宿泊施設がセットになった、いわゆるパック旅行商品を予約できれば、交通費と宿泊費を合わせて1泊2日で35,000～37,000円程度に抑えることができたかもしれないが、訪問先を決定するまでにはやはり時間がかかり、訪問先が決まった後も、訪問日の調整をする必要があり（受講生間の日程調整に加え、訪問先への調整）、数か月前にパック旅行商品を予約することは難しかった。本原稿執筆時点（2026.06.15）では、ホテルリブマックス両国が1泊10,000円前後、ホテルリブマックス浅草スカイフロントが1泊12,000円前後であり、往復新幹線と合わせても40,000円前後はかかる計算になる。

<sup>4</sup> 東京大空襲・戦災資料センターへ「学校団体」として訪問する場合、「東京大空襲・戦災資料センター 利用申し込みFAX送信票」を送る。見学内容をチェックする欄があり、ガイダンス・映像鑑賞、空襲体験者のお話、展示見学の3か所にチェックを入ると、3つすべての見学ができる。とくに、空襲体験者のお話は重要で、別途謝礼支出が発生するが、平和学習のうえで欠かすことができない。また、「質問・感想・交流の時間が必要な場合はご相談ください」とも記されており、遠慮なく質問させていただきたい旨を事前に伝えた。展示見学の際にガイド希望「有」とすると、学芸員の方による展示物の説明を受けることができる。展示見学の際にも質問をさせていただいた。

東京大空襲・戦災資料センター ご担当者 様

2026 (令和8) 年2月26日

突然のご連絡にて失礼いたします。

龍谷大学法学部「法政アクティブリサーチ」受講生（一同）です。

先ほど「東京大空襲・戦災資料センター利用申し込み送信票」をファックスにて送らせていただきました。

現在、私たちは「法政アクティブリサーチ」という授業で日本の戦争の歴史について学んでいます。戦後 80 年となり戦争を知らない世代が増えるなかで、若い世代が戦争の現実や平和への意識について関心を持ち考えるきっかけを作りたいと考えています。

つきましては、貴センターを訪問させていただき、お話を聞かせていただきますようお願い申し上げます。

龍谷大学法学部「法政アクティブリサーチ」受講生一同

### (3) 質問項目の検討

現地での聴き取りに際し事前に質問内容を検討した。これには本学が導入している manaba を用いた。<sup>5</sup>東京大空襲・戦災資料センターのウェブサイトやその他の資料を事前に用意し、受講生1人あたり5～6個の質問を考え、全員が manaba のレポートに提出、それらを項目ごとにまとめた。質問項目は次の通りである。

1 東京大空襲・戦災資料センターの特色について	
<input type="checkbox"/>	まず、大きな質問からさせていただきます。資料を集める上で大変だったことはございましたか。
<input type="checkbox"/>	資料センターは国立で入館料と寄付のみで運営しているとのことですが、戦争を体験した世代が減少している中で維持が難しいと感じることはなかったでしょうか。
<input type="checkbox"/>	資料センターをはじめとする戦争に関する博物館や遺跡を訪れる人は、もともと戦争に関して関心がある人が多いように感じます。そうではない、戦争にあまり関心のない世代や人々にこの場所を知ってもらい、足を運んでもらう為に何か工夫していることはありますか？あるいは難しいと感じる点がありますか。
<input type="checkbox"/>	展示についておたずねします。この資料センターに来た人には、とくにどのようなことを感じてほしいと考えていますか。また、それを感じてもらうために、何か工夫をされているところがあるとすれば、それはどのようなものか教えてください。

<sup>5</sup> 株式会社朝日ネットによるクラウド型教育支援サービスである。 manaba ウェブサイト <https://manaba.jp/products/> (閲覧日 2026 年 6 月 10 日)。

<input type="checkbox"/>	(1つ上の質問に関連して)若い人たちがこの資料センターを訪れたときとくに に見てほしい展示は何ですか。また、若い人たちに伝えたいメッセージはございま すか。
<input type="checkbox"/>	資料センターでは、兵士の視点ではなく「市民の生活」や「子ども」の視点を重視 して展示しているように感じましたが、それは、空襲が「市井の人々」(しせい のひとびと＝一般庶民)の生活を奪うものだからという理由にもどづいていて と考えてみました。そのような理解で合っているのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	資料センターのパンフレットを事前に読んできました。パンフレットには「平和へ の願い」という言葉があります。この資料センターでは、「平和への願い」につ いて、どのような展示や体験を通して伝えられていると思われますか。
<input type="checkbox"/>	写真・実物資料・証言などさまざまな展示方法が使われていますが、文章だけで伝 える場合と比べて、どのような違いや効果があると思いますか。
<input type="checkbox"/>	空襲の被害を伝えるという役割が資料センターにはあると思います。今から約80 年前の空襲の被害を伝えることももちろん大切ですが、今の時代に、過去におけ る空襲の被害を伝えることの意義はどのようなもののでしょうか。
<input type="checkbox"/>	戦争とは互いが互いを傷つけ合うものなので、(戦争をしている当事国の)どちら が正しいかを議論することは、あまり有益ではないという考え方もあるかと思 います。そうすると、戦争の悲惨さを伝える資料館では、訪れる人々に中立的な 観点から物事を伝えるということも必要になってくると考えられますが、そのよ うな観点から展示をするということはされているのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	展示の中で「日常生活が戦争によってどのように変わったか」が分かるものはあり ますか。
<input type="checkbox"/>	資料センターには、この近辺の小学校や東京都内の小学校の子どもたちが平和学 習のために来ることはありますか。また、このセンターを訪れた子どもたちの戦 争や平和に対する意識は、訪問前と比べて変わったりするのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	今も、この資料センターの周辺や、空襲を受けたそのほかの場所から、東京大空襲 のときの遺品が見つかることはありますか。
<input type="checkbox"/>	今でも新しく寄贈される資料はありますか。また、最近見つかった資料で特に驚 いたものはありますか。
<input type="checkbox"/>	展示されている焼夷弾は模型だけでなく実物もあるそうですが、実際に触れたり重 さを実感したりすることで当時の人たちが感じた恐怖についてどのような学びが得 られますか?
<input type="checkbox"/>	焼夷弾を実際に再現した「模型」で焼夷弾の実感ができるということですが、来館者 はどのような反応を示すことが多いですか。
<input type="checkbox"/>	私は神戸出身で阪神・淡路大震災については小学、中学と毎年振り返る月間があ り、忘れないように学んできました。神戸にも阪神・淡路大震災の資料館が存在し 校外学習などで行ったことがあります。それ以外では全く行く機会がありません。 こちらの東京大空襲戦災資料センターは東京在住の方も多く来られるのですか?
<input type="checkbox"/>	パンフレットには、日本が受けたアメリカ軍による無差別爆撃の被害だけでなく、 満州事変以降に日本が中国などへ行った空襲の事実についても書かれていました。 「被害の記録」だけでなく、「加害の歴史」も含めて展示されているということだ と思うのですが、このセンターを訪れる人に、「被害と加害」をどのようにバラン スをとって伝えようとされているのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	展示の仕方についておたずねします。たとえば、1階には焼夷弾の実物の「模型」 があり重さを実感できる展示があります。一方で、2階は被災した人びとの体験や 想いに焦点を当てた空間になっているとのこと。兵器という「物」、物質的 な脅威が1階の展示で分かり、一人一人の心理的な喪失体験が2階で分かる、と いうように、1階と2階で分けて展示することで、このセンターを訪れた人に、ど のようなことに気づいてほしいと考えていらっしゃるのでしょうか。

<input type="checkbox"/>	1999年に東京都の「平和祈念館」建設計画が凍結された後、4000名を超える方々の民間募金によってこのセンターが開館したという経緯を拝見しました。公的施設ではなく、国立民営の施設として資料をまもり、語り継ぐうえで、現在直面している最大の困難と、民間だからこそ発揮できている強みは何だとお考えですか。
<input type="checkbox"/>	4000人もの方々の支援により建てられた民間の資料館ならではの公立とは違う視点や受け継がれるメッセージなどありますか。
<input type="checkbox"/>	東京都の計画が一度凍結され、4000人以上の寄付でこのセンターができたそうですが、国や自治体で作る資料館と、みなさんが協力して作られた、言わば「民間の方々の手作り」で作った資料館とでは、伝える内容や、関わっているみなさんの熱心さに、何か「違い」のようなものはありますか。
<input type="checkbox"/>	体験者は全人口の1割を切ったと聞いています。体験者の数が少なくなる中で、映像や物だけで当時の熱さや音を伝えるために展示で一番工夫していることは何ですか？
<input type="checkbox"/>	この資料センターは、将来にわたり、どのように継承されていけばよいでしょうか。

2 東京大空襲について	
<input type="checkbox"/>	空襲があった当時から東京は人口が1番多かったと思うのですが地方への学童疎開はどの程度効果がありましたか。
<input type="checkbox"/>	1945年9月にアメリカ軍が撮影した資料がありますが、この地域がこれほど激しい被害を受けたのは地理的な原因などはあると考えますか？
<input type="checkbox"/>	空襲の被害を受けた、とくに子どもたちについて質問なのですが、医学的な治療が必要だった場合も多くあったらと思います。つまり、やけどや、その他のけがの治療のことです。それと同時に、子どもたちへの精神的な支援も必要だったのではないかと思います。つまり大空襲の被害を受けた子どもたちへの、今で言えば「精神的なケア」とか「心のケア」ということなのですが、その点についてはどのような取り組みや配慮が行われたのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	1945年3月10日の空襲で、被害が特に大きくなった要因は何ですか。
<input type="checkbox"/>	空襲で腕や足を切断した人たちは戦後、偏見や差別を受けたと『戦争ミュージアム』という本で読みました。ただ、その本には、偏見や差別についての具体的な内容が書かれていませんでした。実際にどのような偏見や差別を受けたのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	なぜ下町地域が集中的に狙われたのですか。学校が多かったことと関係しますか。
<input type="checkbox"/>	焼夷弾の戦術的な特徴は何だったのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	軍事施設だけでなく民間の施設や普通に生活していた人々が標的になったのは、どのような背景があったのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	大空襲のとき防空壕は実際どの程度役に立ったのでしょうか。ほとんど役に立たなかった感じですか。

3 平和学習や平和教育の在り方について	
<input type="checkbox"/>	資料センターの存在を知らない人たちに向けて、外部の施設やイベントなどと連携して行っている活動などはありますか？
<input type="checkbox"/>	「平和とは何か」という問いと資料センターの展示内容はどのように結びついていますか。

<input type="checkbox"/>	満州事変や日中戦争のように戦争で国家間の摩擦を解消する時代があったことは確かですが、今も国家間の摩擦が無くなることはありません。国家間の摩擦を解消するにあたり、戦争ではない、それ以外の方法を採用が必要だと思っていて、それは外交、とくに、対話を重視する外交（対話外交）だと考えています。また、対話外交を進めていく上で、私は「平和」であることがとても大切だと思っています。「武力」をちらつかせて、相手の国を委縮させたり、刺激したりすることは「戦争」を誘発するので、「武力」をちらつかせてはならず、あくまでも「平和」をベースにした外交を徹底すべきだと思っています。そのための平和学習とか平和教育の在り方を追求すべきだと思っています。長くなってすみません。この点いかがでしょうか。
<input type="checkbox"/>	今の日本は実際の戦争に巻き込まれることなく、ある意味「平和」ではありますが、そのため危機感が足りない指摘されることもあります。平和のために、私たちのような学生に期待していることはありますか。また、私たちにできることがあるとすれば、それはどのようなことだとお考えですか。

4 若い世代への継承について	
<input type="checkbox"/>	若者に戦争の悲惨さが分かってもらえるようにするにはどう伝えたらいいと考えていますか。
<input type="checkbox"/>	直近の世界ではイラクに対してアメリカの軍事作戦などにより多くの人々が亡くなっていますが、アメリカは何十年、何百年も前から変わっていないということだと考えますか。
<input type="checkbox"/>	若い世代に過去にあった事実を「自分のこと」としてとらえてもらうために、展示方法などで工夫していることはありますか。
<input type="checkbox"/>	戦争を体験した世代が日本の全人口の1割を切る現状において、展示資料にQRコードを付けて携帯端末から証言動画にアクセスできるなど、新しい試みをされています。戦後生まれの若い世代に、過去の歴史を「自分のこと」として受け継いでもらうために、展示の情報の整理において最も重視していることは何ですか。
<input type="checkbox"/>	「戦争の記憶をどのように次世代へ伝えるか」という点について、資料センターではどのようなことを大切にしていますか。
<input type="checkbox"/>	2階の展示では、空襲後の仮埋葬（かりまいそう）や戦災孤児の問題に加えて、補償運動についても扱われているとありました。軍人・軍属に対する戦後の補償と比べ、空襲による民間人の被害者に対する補償問題はどのような経緯をたどったのでしょうか。また、空襲による民間人の被害者に対する補償問題には、現在も、何か課題が残されているのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	戦争中の経験者が少なくなっている今、若い世代の人たちが、戦争の悲惨さについてより深く学び、その知識を共有しなければならないと思います。私たちは、授業のなかで、どうやったらよいか？ということを考えているのですが、より多くの人に戦争の悲惨さや苦しみを「正しく理解してもらう」には、どのような方法で広めていけばよいのでしょうか。私たちが考える上でのヒントのようなものがあれば教えてください。
<input type="checkbox"/>	戦争体験者が少なくなっている今、戦争を次の世代に伝えていくことにはどのような意義があると思いますか。また、そのために資料館はどのような役割を果たしていると考えますか。
<input type="checkbox"/>	梯久美子（かけはし・くみこ）さんの『戦争ミュージアム』という本を読んできました。その本の中で、梯さんは、「戦争ミュージアムは過去を保存する場であると同時に、現在の社会が過去をどう解釈するかを映し出す鏡である。」と述べています。「過去の出来事」を「現在の社会」に反映させるために、私たちは次の世代に、また次の世代に、「過去の出来事」をどのように伝えるべきだと考えればよいのでしょうか。これも、授業で考える私たちへのヒントとして教えていただけますか。
<input type="checkbox"/>	空襲を「遠い昔のこと」のように感じる若い世代も増えていると思いますが、今の10代20代にこの展示を説明する際、特に意識している「言葉選び」などはありますか。

## 第3章 平和スタディツアーへ

### I 旅程の検討

東京への日帰りで平和スタディツアーを検討するにあたり、次の諸点を考慮した。

- ・1泊2日から日帰りへと変更したことにより、前日のうちに東京へ行くことができなくなった。そのぶんスケジュールは窮屈になるが、各自朝早く出ることとし、東京駅には午前のように余裕をもって到着するようにする。
- ・受講生はそれぞれ京阪神の各地から出発するため、各自で新幹線を予約のうえ東京駅まで移動し、地下鉄（東京メトロ）への乗り換えに便利のように、東京駅丸の内北口改札を出たところで集合することとする。
- ・東京大空襲・戦災資料センターに訪問する前に、各自で質問内容を確認しておく。質問者の役割分担は東京駅集合後、訪問前までの時間で決めることとする。
- ・日帰りであることからエクスカージョンの時間を確保することが難しいかもしれないが、時間の許す限り各自でエクスカージョンをすることを推奨する。
- ・エクスカージョンの候補地は東京駅周辺、皇居付近、銀座などがある。東京なので美味しいものがたくさんある。
- ・帰りの新幹線は最終ではなく余裕をもって予約することとする。

これらを考慮して決めたのが次の旅程である。

日付	種別	時刻	内容	備考
3/7 (土)	移動	各地出発→10:30	自宅 → 東京駅	各自新幹線で東京駅へ移動
	集合	10:30	東京駅 集合	東京駅 丸の内北口 改札を出たところで集合
	徒歩	10:30～10:40	東京駅→大手町駅	
	移動	10:40～11:00	大手町駅→住吉駅	東京メトロ半蔵門線
	昼食	11:00～12:30	昼食	
	徒歩	12:30～13:00	住吉駅→資料センター	
	訪問	13:00～15:30	資料センター	東京大空襲・戦災資料センター
	徒歩	15:30～16:00	資料センター→住吉駅	
	移動	16:00～16:20	住吉駅→大手町駅	東京メトロ半蔵門線
	徒歩	16:20～16:30	大手町駅→東京駅	
	検討	16:30～18:00	ミーティング	
	解散	18:00	東京駅 解散	東京駅で解散
	移動	18:30→各地到着	東京駅 → 自宅	各自新幹線で帰宅する

なお、受講生の予定を考慮した結果、2つのグループに分けて訪問することとした。第1グループは3月7日、第2グループは3月19日であり、上記の旅程表は第1グループのものである。以下、第1グループの行程に基づき記述することとし、第2グループの行程に言及する場合には「第2グループでは」などと適宜表記する。

### II 東京大空襲・戦災資料センターへ

#### (1) 東京大空襲・戦災資料センターまでの道のり

当日は受講生が各自出発し、新幹線を利用して東京駅まで向かった。新神戸駅から新幹線に乗った受講生もいたが多くは京都駅からの乗車である。いつも観光客でごった返している京都駅は早朝だったためか仕事に行く会社員などが散見されるほどである。新幹線に乗るとお菓子を食ったり、動画を見たり、景色を見たりと移動時間も楽しむことができた。東京方面進行方向左手の窓側座席にすわると富士山を見ることができる。前日と当日早朝までの雨の影響で雲が出ていたが、東海地方を東京方面に進むにつれて、雲が切れ始めその合間から、頂上に雪が積もったお手本のような富士山が見えた。実際に目の前に広がる景色は迫力がある。新幹線の車窓から見える景色は関西とは異なる雰囲気があり、東京へ近づくにつれて建物の多さや人の多さに圧倒された。



2026. 03. 07  
富士山 新幹線の車窓から  
新富士駅付近

東京駅に到着すると、まず目に飛び込んできたのは、視界を埋め尽くすような巨大なビル群であった。京都とは異なる圧倒的な都市の密度と、洗練された街並みが目の前に広がる。駅の規模の大きさや人の多さ、大阪や京都も負けてはいないと思うが、さすが東京！である。集合場所は普段テレビや写真などで見ていた有名なレンガ造りの駅舎の中である。駅の中が広く集合場所に辿り着くのが大変だった。そこで10時30分に集合し東京駅から地下鉄に乗るため大手町駅（東京メトロ・半蔵門線）まで徒歩で移動した。歩きながら立ち並ぶ高層ビルをながめると、普段見慣れている景色とは全く違う都会の雰囲気である。特にビルの高さにはずっと驚かされ、東京の街の大きさを改めて実感した（受講生のなかには大阪とさほど変わらず驚かないとの声もあり！）。



2026. 03. 07 東京駅 丸の内 北口

地下鉄を降り昼食をとりながら質問事項の最終確認を行った。最寄り駅から訪問先である東京大空襲・戦災資料センターまで20分程度歩いた。東京はずっと高いビルが立ち並んでいると思っていたが、歩いているとそんなに高いビルが立ち並んでいるわけではないことに気づいた。後で分かったことだが、今歩いている場所が東京大空襲の大きな被害を受けた場所である。当時多くの人々が住んでいた生活の場だった。今も生活の場なのだ。だから高層ビルではなく、私たちになじみのある都市の見慣れた風景が広がっている。歩いている途中で遠くにそびえる東京スカイツリーを見ることができた。現代の平和と繁栄を象徴するようなスカイツリーの姿は、これから私たちが学ぶ「かつて焦土と化した東京」の歴史とは対照的に感じられた。



2026. 03. 07 東京大空襲・戦災資料センター 第1グループ



2026. 03. 19 東京大空襲・戦災資料センター 第2グループ

## (2) 映像資料の視聴

東京大空襲・戦災資料センターの入口付近には2つの平和像と防火水槽が置かれているのが目に入った。入口から建物の中に入り、受付でパンフレットや展示品リストをいただいた。その後、東京大空襲や資料センターの説明に関する映像を視聴しガイダンスを受けた。担当してくださったのは学芸員の小藺崇明さんである。資料館の歴史や、東京大空襲について説明があり、実際に東京大空襲がいつ起こり、日本がどのような状況下で起こったものなのか、そして国民はどのような様子であったのかの説明を受けた。人口が集中している東京の下町を空襲することによって、国民の戦意を喪失させることが目的だったという。ガイダンスと映像により東京大空襲が真夜中に起きたことを再確認できる。広島と長崎への原子爆弾の投下はいずれも明るい時間帯に起きたことである一方で、東京大空襲が真夜中に起きている。資料センターを訪問してすぐに映像資料を視聴したため、当時の状況をまず知ることができ、その後の体験者の方のお話や学芸員の方による館内展示物の説明をより分かりやすく受けることができた。

1945年3月9日の夜、3月10日になってからの午前0時15分空襲警報が発令され、午前2時37分までの2時間22分間に、大規模な空襲を受け、死者は約8万8千人をかぞえたという。<sup>6</sup>映像では東京大空襲の様子や、当時の東京の被害状況について説明されていた。

<sup>6</sup> 東京大空襲・戦災資料センターの初代館長、早乙女勝元さんの著書には次のような記述がある。「3月10日零時15分空襲警報発令、それから2時37分までの賞味142分間に、死者8万8793名、傷者4万918名、罹災者100万8005名、焼失した家屋は26万7171軒、半焼した家屋971軒、全壊が12軒、半壊が204軒、計26万8358軒（警視庁資料による）。ことにその被害は主として江東ゼロメートル地帯に集中し、浅草区、深川区、本所区、城東

短時間のうちに多くの人が犠牲となり、町が焼け野原になっていく映像や写真は非常に衝撃的であった。特に、焼夷弾によって木造住宅が次々と燃え広がっていく様子から、当時の人が逃げ場を失っていたことがよく分かった。スクリーンの裏側にある壁には大きな一面の地図があり被害状況が分かるようになっている。映像や地図によって空襲の被害や当時の状況について知ることができ、想像していた以上に被害の大きな出来事だったことを実感した。

### (3) 体験者の方のお話

ガイダンスの後、空襲体験者の方のお話を拝聴した。お話をしてくださったのは二瓶治代さんである。当時子どもたちの間で「戦争ごっこ」という兵隊の真似をする遊びが流行っていたというような日常の話から、東京大空襲のあった3月10日に目にした光景を話していただいた。二瓶さんが東京大空襲を経験した当時は8歳の小学校低学年で、学童疎開の対象にならず東京に残ることになったそうだ。また、戦争が続く中で大人や若い男性が次々となくなっていくという話も聞いた。3月10日の前にも東京では空襲があり、「じわじわと来た」という。下町の人たちは空襲を気にしていなかったが、銀座で空襲が起き異変を感じたそうだ。大人たちは、日本は勝っていると聞かされていたのに、なぜ空襲が起これのかと疑問を抱き始めたという。二瓶さんは、空襲警報が鳴ったときの恐怖や、家族と離れ離れになりながら必死に逃げたこと、また、火の勢いが非常に強く周囲が真っ赤に染まっていたことや、水を求めて多くの人が川へ集まっていたことを説明してくださった。風が強かったことが広範囲の大きな被害へつながったという。

二瓶さんのお話はおおむね次のようなものであった。空襲が起きる前日の3月9日、二瓶さんは国民学校を終え、友達とも普段通り過ごしていたという。友達と遊んでいて、次の日も遊ぶ約束をしていた。当時は戦争ごっこが流行っており軍人に憧れ、敵を殺して自分も死ぬんだという考えを持っていることが当たり前だった。就寝前に、すぐ避難できるように服を脱いだ順に枕元へ置き、その横にリュックサック、防空頭巾、靴を準備して眠りについた。真夜中に空襲警報が鳴り、父親から「今日はずっと違う、起きろ！」と声をかけられ、急いで身支度をして外へ出た。隣家の家族と一緒に防空壕に入るようになったが、その時外で見張りをしていた父親から外に出て安全な場所に逃げるように言われ、その声に呼び寄せられて外へ出て逃げた（隣家の家族からは防空壕の外には出ないほうがいいと言われたが、父親に従って外へ出た）。外ではみんながパニック状態で走り回って逃げ、小さい子どもは親と手をつなぎながら逃げているが転んでしまう子どもも多く、転ぶともう人の下敷きになっていた。火がすぐそこまで来ていたので必死に家族で手をつないで逃げた。川の堤防のようなところに上り少し逃げ下を見下ろすと、馬と飼い主がいた。馬に着けていた荷物に火が燃え移り悟ったように馬は4本脚でしっかり立ち暴れることもなく燃え、飼い主にも火が移り燃えていたことが怖かった。町は猛火で壊滅的な状態になり、逃げ惑う人々の中で私はいつの間にか家族と離れ離れになってしまった。父親と手をつなぎながら駅の方へ向かって逃げているが、途中で防空頭巾に火がついてしまったため、父親に「頭巾を取れ！」と言われ、手を離してひもをほどこうとした瞬間、炎による強風にあおられ、一人だけ吹き飛ばされてしまった。真っ赤な空の中へ若草色の防空頭巾が舞い上がり、炎の中へ消えていったという。吹き飛ばされた先では、辺り一面が炎に包まれ、どこをどう逃げればよいのか分からない状況だった。建物の陰に燃えながら立っている人の姿を見た。炎は赤ではなく緑色もしくは青色に見え、幼かった二瓶さんは助けようとして近づこうとしたが、誰かの声で我に返り、その場を離れた（青いきれいな火が体についている人がいて、学校で習った火の消し方で消そうとしたが、遠くから近づくと誰かから言われ離れた）。

その後、二瓶さんは家族とはぐれ、一人ぼっちになってしまった。逃げている途中しゃがみ込んでしまい、周りの人も集ってきて私の上に折り重なるようなかたちになった。しゃがみ込んだ私の体は小さかったので押しつぶされてしまった。押しつぶされたことに加え恐怖のためもあり意識が遠のいたが、熱さや苦しさの中で意識が遠のく中、「生きるんだ」「こ

---

区の四区は、ほとんど全滅に近い決定的ともいえる大被害を受けた」（早乙女勝元『東京大空襲』岩波新書、1971年、14-15頁）。なお、同書によると「現在では、東京大空襲3月10日の犠牲者数は、「約10万人余」で定着している」とされている（同書、232頁）。

んな所で死ぬな」と叫ぶ声が聞こえていたという。朝になって気が付くと、多くの人々の下敷きになっていたが、その人たちに守られるようなかたちで生き残っていた。そして、自分を守っていたのは父親だったことを知ったそうだ。炎の中で父親は二瓶さんを見つけ、自分の体を使って必死に守り続けていた。周りを見渡すと全部焼死体で、おおいかぶさってきた人たちの下敷きになっていたから私は生き延びた。防空壕に残った隣家の家族は防空壕の中で焼けて亡くなっていた。

二瓶さんによると、道端に転がる焼死体が、もはや人間には見えず炭化した丸太のように見えたそうだ。あまりの惨状に人々は涙を流すことさえ忘れ、ただ呆然と立ち尽くすのみであったとおっしゃっていた。二瓶さんは、自分を守ってくれたのがさっきまで生きていた誰かであったこと、その遺体が焼けて崩れ、重みとして感じられた記憶を、生涯消えることのない痛みだと言い、だからこそ、その人たちの分まで語り続けなければならないという強い使命感を抱いているという。このように、命の尊厳や感情が完全に失われてしまうことを、二瓶さんは、「人間が人間でなくなる」と表現されていた。



2026. 03. 19 空襲体験者の二瓶治代さんのお話を聞いているようす  
壁に大きな地図が掲げられており、被災した状況が分かりやすく示されている  
地図の前でこちらを向いて話してくださっているのが二瓶さん  
自由時間の際、この地図をまた見に来る受講者が多かった  
東京大空襲・戦災資料センターにて

戦争終結後、国民の多くは戦争が終わることを望んでいたが、それを声に出すことは難しい状況だった。事実、敗戦によって戦争が終わると、当時子どもだった二瓶さんは「ほっとした」と話されていた。しかし、周囲の大人たちは泣いており、「なぜ戦争が終わったのに泣いているのだろう」と不思議に思ったそうだ。その後、数年が経ち、日本国憲法が制定され、その中で平和主義、つまり「もう二度と戦争をしない」という考えが憲法に明記された。そこで二瓶さんは再び安心し、涙を流して喜んだと話されていた。しかし、その後朝鮮戦争が始まり、学校では「また日本が戦争を始めるのではないか」という噂が広がり、不安になったそうだ。二瓶さんは近くにいる大人に「また戦争をするのか」と尋ねたところ、「日本国憲法があるから日本は絶対に戦争をしない」と言われ、本当にこの憲法ができて良かったと心の底から思ったと話されていた。

体験談を拝聴した後、私たちは、二瓶さんにいくつか質問をさせていただいた。なぜ下町地域が集中的に狙われたのか、学校が多かったことと関係があるかとの質問には、「戦場で戦っている人を狙うより、夜中に民間人を攻撃するほうが戦意を喪失させるのに効果的と考えられたためだ」との回答を得た。また、空襲の被害を受けた中でもとくに子どもたちについて、けがの治療だけでなく今でいう「精神的なケア」や「心のケア」についてはどのような取り組みや配慮が行なわれたのかとの質問には、「精神的なことに関して言えば、今でも強風は空襲を思い出して恐怖を感じる。一緒に空襲を体験した妹は逃げている間に足に大きなやけどを負い、そのけがによる直接的な苦痛に加えて、大きな傷が残ってしまったことによる精神的なダメージも大きかった。時間がたち、大人になるにつれて精神的ダメージを乗り越えていった」という（二瓶さんの妹さんは大人になり学校の先生になったそうである。

そして、子どもたちに足のやけどのことを聞かれ空襲の話をした頃から少しずつ精神的なダメージを乗り越えることができるようになったという)。戦争が終わった後、どのように乗り越えてきたか、どのように生きてきたかとの質問には「戦争当時、新聞やラジオでは日本が戦争に勝っているという情報だけを流していたため、国民はそれを信じるしかなかった。しかし結果的に負けてしまったことで、『国民はだまされていたんだ、本当のことが知りたい』といった気持ちに変化していった。『本当のことが知りたい』という強い気持ちを持ち生きてきた」。

二瓶さんのお話や質問への回答のなかで、私たちの記憶に今も深く残っているのは、「戦争は終わった後も人々の心に深い傷を残すものであり、二度と繰り返してはいけない」という言葉である。二瓶さんが資料センターでの活動を通じて、修学旅行生や若者たちに直接語りかけ、一番に伝えたいことは次のことだという。「平和を単に戦争がない状態とするのではなく、一人ひとりの命が、人間として、尊重されることである」。これは、実際に大空襲を経験された二瓶さんによる平和の定義である。この平和の定義を私たちも受け継ぎ、次の世代へ引き継ぐ決意をした。

#### (4) 東京大空襲・戦災資料センターの館内を見て回る

二瓶さんのお話の後、学芸員の方から当時の東京大空襲の被害を示した大きな一面の地図について、見方を教えていただき、地図の周辺にある当時の状況を再現した絵などについても説明していただいた。その後2階に上がり館内を案内していただき多くの展示物を一つひとつ説明していただいた。



2026. 03. 07 学芸員の小菌崇明さんによる説明を聞いているようす  
年表（「防空体制年表」）の前でこちらを向いて話してくださっているのが小菌さん  
東京大空襲・戦災資料センターにて

当時の家の中を再現している展示があった。光が外に漏れ出さないように窓には黒い布をかぶせ、電気にも黒い布を巻き最小限の明かりまで抑えていた。灯火管制下の部屋を再現した展示である。灯火管制とは、敵機に見つからないよう夜間の明かりを外に漏らさないようにするもので、部屋の中は薄暗く、当時の緊張感が伝わる空間になっている。他にも、火を消すための道具が複数あり、防災頭巾や当時着ていた服を再現したマネキンもあった。実物大の爆弾の模型が展示され、実際に手で持つ体験もできる。

また、防空壕の再現模型が展示されていた。防空壕は土を掘って作るイメージがあるが、二瓶さんの証言をもとに再現された模型であり、土嚢袋を積み重ね土で隙間を埋めただけの造りで、実際には役に立たなかったという。防空壕というのは、通常、地面の奥深くに埋められた大きな空間のようなものを想像する。しかし、再現模型によると、高さは150cmほどで、地面も40cmほど掘られているだけだった。床にはスノコが敷かれ、壁際には向かい合って座れる長椅子が設置されていた。通常想像するものよりも狭く、そのような場所に多くの人が避難していたことに驚かされる。模型は細かい部分まで丁寧に再現されており、中には二瓶さんを模した人形も置かれていた。防空壕の中は決して安全ではなく、崩れる可能性があり、多くの人が生き埋めになったという説明を思い出しながら見学した。話を聞くこ

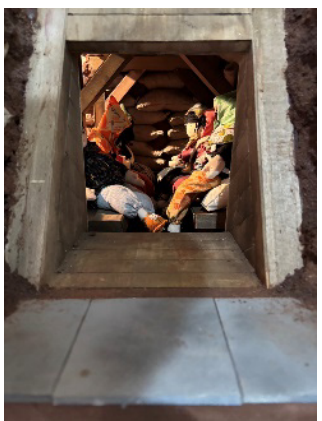
とに加え、実際に模型を見ることで当時の状況がより分かりやすく伝わってくる。また、空襲を体験された方のお話と再現模型を合わせて見ることで、空襲時の人々の不安や恐怖をより身近に感じることができる。



2026. 03. 07 撮影  
展示：灯火管制下の部屋のように  
東京大空襲・戦災資料センターにて



2026. 03. 07 撮影  
展示：防空壕の再現模型（全体）  
東京大空襲・戦災資料センターにて



2026. 03. 07 撮影  
展示：防空壕の再現模型（中のようす）  
東京大空襲・戦災資料センターにて

展示物のなかには、実際に使用された焼夷弾の実物などもあり、これが頭上から大量に降り注いだという事実は恐ろしく、その構造や仕組みを知ることによって、いっそう空襲の無差別性と残酷さを感じることができた。焼夷弾の中にはゼリー状の燃料が入っており、落下の衝撃で衣服や家屋に飛散しやすく、一度付着すると落ちにくいという特徴があり、日本の家屋を効率的に焼き払うために開発されたそうである。この焼夷弾に関して、別の場所に展示されていた『防空新聞』内にも記述があった。その中には「少しも危険はない」という見出しのもと、「焼夷弾1個の威力は大したものではなく、炎に素手をかざすくらい近接しても少しも危険はない。夜間にばらばらとこれに見舞われるとその光だけで大げさに感じられるものだが、落ち着いて炎が密着個所に燃え移らぬうちに消すことが大切だ」というものや、「案外、消しやすい」という見出しのもと、焼夷弾による火の消し方が書かれているものがあった。当時、国民が情報を得ることのできる限られた媒体で、このような記述をすることで、

戦意を喪失させないようにしたり、炎が燃え広がり甚大な被害が出ることを防いだりしていたのだろう。

他にも印象に残ったのは、空襲によって変形した金属製品や、焼け跡から見つかった遺品である（子どもの遺品もある）。これらは単なる展示物ではなく、当時確かに人々がそこで生活していた証であり、多くの命が失われた現実を物語っている。戦争のなか空襲によって焼け焦げた日常生活そのものだ。

#### （5）自由時間

学芸員の方に館内を案内していただいた後は出発の時刻まで自由行動となった。その時間を利用して、私たちはそれぞれ関心をもった展示物をもう一度見にいたり、資料を読んだりして過ごした。展示されていた子どもの遺品が特に印象に残ったという受講生は、同じ年代の人々が戦争によって普通の日常を失ったことを考えると、現在の平和な生活が当たり前ではないことを改めて感じたという。また、他の受講生の間でも、実際の体験談を聞いたことで戦争が過去の出来事ではなく身近に感じられたといった感想や、写真や実物資料を見ることで文章だけでは分からない悲惨さを知ることができたといった感想が交わされた。

2階の展示室から1階に降りて資料を見ていると学芸員の小菌さんから「何か聞きたいことある？」と声をかけていただいた。私たちは「実は事前にこんなに質問を考えていて」と答えた。ある受講生は、館内をひと通り見学した後で質問の時間があると思っていたという。そのため、二瓶さんの話を最初に聞いたが、用意してきたいずれの質問も見学した後に聞くものだと思っており、その意味で、訪問全体を通して質問するタイミングを見つけるのが難しかった。この点、つまり質問するタイミングについては、訪問前に授業担当教員も交えて十分検討しておくべきだったと反省している。小菌さんがタイミングよく声をかけてくださったおかげで、私たちのうち数名が、小菌さんのお声がけをありがたく受け、別途の質問をさせていただく機会を得た。小菌さんによる回答もあわせて紹介する。

資料を集める上で大変だったことはあるかとの質問に対し、「ない。ただし、いただいた資料を整理するのが一番大変だった」。広島、長崎や沖縄の平和資料館とは違い民間で運営されているが、民間ならではの強みや弱みはあるかとの質問には、「弱みは、圧倒的にお金がない。市や区などから支援はない。焼夷弾の模型を作るのに一番お金がかかった。強みは、弱みとは逆で市や区などから指示などを受けることがなく、展示も自由である」。空襲の体験者が減ってきているが、新しく得られる当時の状況を聞き込むことが少なくなっていると感ずることはあるかとの質問に対し、「体験者は現在人口のおよそ10%で毎年大体1%くらい低下してきている。（空襲体験者の現在の年齢は）最低でも81歳以上の方になるが、当然現在81歳の方に当時の話を聞いても（当時乳幼児だったため）覚えていないと返ってくる。そのため詳しく聞き込むためには、二瓶さんくらいの年齢の方から聞くことになる。高齢になってきているため、記憶も薄れている。だからしっかり詳しく聞き込んでいった。例を挙げると、防空壕の再現したものがあつたが椅子はもう少し長かつたかと聞くと、「そういえば高さはこれくらいで、もう少し低かつた」と詳しく聞き込んでいくと記憶がよみがえることがある。ただ二瓶さんも長らくは、この話をしたくなかつたという。体験者が空襲の話をするまで（短くとも）20年ほどかかつたといわれており、いまでもそのトラウマから抜け出せず、聞き込みをすることは難しい。戦争には関係ないけど、高校野球のサイレン、花火の音を聞くことや、テレビで津波の映像を見ることで当時のトラウマを思い出す人も少なくないのが現状である」。

小菌さんには、（館内を案内していただいていたときだったと記憶しているが、）なぜ東京大空襲は広島や長崎に比べて学ぶ機会が少ないのかと質問した。小菌さんからは、原子爆弾の被害に比べて全国的に取り上げられる機会が少ないことや、東京という大都市の発展の中で記憶が薄れつつあることなどを教えていただいた。また、「だからこそ若い世代が学び続けることが重要である」と、私たちを励ましてくれるようなひと言をいただいた。

この点に関連する質問を私たちは二瓶さんにもしている。これから先戦争を経験した方がいなくなる時が来るが、その時残された私たちを含む次の世代が戦争の悲惨さを理解し、それをまた次の世代、次の世代へと受け継いでいくために私たちにできることは何だと考えら

れるかと質問した。この質問に対し二瓶さんは、「難しい質問ですが、大切なことは戦争の悲惨さを忘れてはならないということを一人一人が意識することだと思います」とおっしゃっていた。二瓶さんが言う戦争の悲惨さを忘れないためにも、若い世代が学び続けることが重要だという小菌さんのはげましに私たちは応えたい。

### Ⅲ 東京大空襲・戦災資料センターをあとにして

訪問先での予定していた時間となり東京大空襲・戦災資料センターをあとにした。地下鉄に乗り大手町駅から歩いて東京駅へ戻った。行きに見た時と同じはずの東京のビル群が、見学を終えた後の自分の目には全く違った光景として映った。夕日に照らされる巨大なオフィスビルや、行き交う大勢の人々の姿を眺めたとき、この圧倒的な繁栄が、かつて一面の焼け野原となった場所の上に築かれているという事実だ。資料センターで見た、火に包まれ逃げ惑う人々の記録と、目の前にある平和で機能的な大都会の姿を重ねると、今私たちが当たり前のように享受している日常が、平和という、ひょっとしたら奇跡かもしれない積み重ねの上に成り立っているのが分かる。

新幹線を利用して京都や大阪、神戸へそれぞれ帰った。行きの車内では観光に近い雰囲気や高揚感もあったが、帰りはそれぞれが見学内容を振り返りながら静かに過ごしていた。ただ、それは決して暗い気持ちではなく、東京大空襲という戦時下の出来事を自分のこととして受け止めたゆえの重みであったと思う。新幹線の車窓から見える都会の夜景を眺めながら、今回のスタディツアーで得た「平和への視点」をこれからの大学生活や日常の中でも大切に持ち続けようと、強く心に刻んだ。現地を訪れてはじめて知り、学ぶことが多い。そのことの重要性を強く感じた一日だった。平和について考える機会を持ち続けることが、戦争を繰り返さないために必要である。



2026. 03. 07 訪問後  
東京駅丸の内口にて  
第1グループ



2026. 03. 19 訪問後  
東京駅丸の内口にて  
第2グループ

## おわりに

2026年4月から、成果報告書の原稿執筆作業に入った。

今回の平和スタディツアーでは予算の都合上1泊2日から日帰りの訪問となり、1か所のみの施設訪問となってしまったため少し心残りはあった。しかし、当初の訪問予定であった靖国神社や遊就館、上野動物園なども近くにあるため、東京大空襲・戦災資料センターへ訪れる際にはぜひこれらの施設にも足を運んでもらいたいと思う。私たちと同じ若い世代の多くの人に、その思いを伝えたいと考え、次のように、いくつかアイデアを出し合った。



2026.05.20 授業のようす 龍谷大学和顔館の教室にて  
若い世代が東京大空襲に関心をもつようになるためのアイデアを出し合っている

・東京大空襲のようすが分かるマンガや絵本のような分かりやすい本があれば子どもたちに浸透しやすくなるのではないだろうか。東京大空襲・戦災資料センターの初代館長であった早乙女勝元さんの作によるマンガや絵本がたくさんある。『東京大空襲ものがたり』（早乙女勝元・作、有原誠治・絵、金の星社、1991年）もその1冊で、子どもたちにもなじみやすい。総務省のウェブサイト『まんが 子ども太平洋戦争物語—明日に生きる』（社団法人日本戦災遺族会〈現在は解散〉、2001年）がある。そのなかに東京大空襲のようすを描いた場面がある。<sup>7</sup>『まんが こども太平洋戦争物語』は全国の小学校等に配布されているそうだ。<sup>8</sup>東京大空襲を扱った新しいマンガやアニメも期待される。

・東京大空襲・戦災資料センターにとって、毎年3月9日と10日は大切な日である。3月9日の夜すでに多くの人が眠っているなか、10日の未明に大空襲を受けたからだ。だから両日とも資料センターとしても大きなイベントが行われている（訪問候補日に3月9日と10日を挙げていたが、当クラスの側の日程が整わず両日のいずれかに訪問することができなかった）。ほかにも一年を通して多くの企画や研究会などがある。それらのイベントなどに大学生がたとえばボランティアとして参加することも考えられる（すでにそのような実践があるかもしれない、この点について訪問時に質問することができなかった）。できれば、大学とのタイアップでボランティアとしての参加を授業として扱い単位化する。

・東京大空襲・戦災資料センターのウェブサイトは学びのための資料がたくさん掲載されており、事前学習や訪問後の確認にあたり役立った。ガイドボランティアの案内も分かりやす

<sup>7</sup> 総務省ウェブサイト [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000333174.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000333174.pdf)（閲覧日 2026年6月15日）。

<sup>8</sup> 総務省ウェブサイト [https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/daijinkanbou/sensai/virtual/comic/index.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/virtual/comic/index.html)（閲覧日 2026年6月15日）。

い。「東京大空襲ってなに？」と題した YouTube 動画もリンクされている。若い世代への訴えかけには TikTok や YouTube、そのほかにも SNS での情報発信などが効果的であると考えられるが、すでに東京大空襲・戦災資料センターには YouTube 公式チャンネルがあり、動画配信がされている。<sup>9</sup>

・VR (Virtual Reality: バーチャル・リアリティ、仮想空間、仮想現実) を活用した「ヴァーチャルツアー」を導入し、当時の体験を VR で可能にすることも考えられるが、私たちが実際に訪問した経験をふまえると、東京大空襲・戦災資料センターにはぜひ足を運んでほしい。ヴァーチャルよりも実物を見たほうが格段に胸に訴えかけてくるものがある。それに、空襲体験者の方のお話は動画配信でも可能ではあるが、私たちの目の前で話して下さった二瓶さんの姿や声を帰校してからもはっきりと覚えているのは、実際に二瓶さんにお目にかかり、お話を聞かせていただき、受講生から質問をさせていただき、それに対し分かりやすく、私たちに語るように、訴えかけるように答えて下さったからである。最寄りの駅から資料センターまで歩いたあの道が強い風の影響もあり燃え広がった場所だったんだと、実際に歩いてはじめて分かる。

・遠方からの来訪者呼び込むために、たとえば東京駅などの主要駅から資料センターまでバスで送迎することを含むツアーを企画するというのはどうだろう。バスの中でガイドンを受けたり、空襲で燃え広がった道や場所を巡ったりすることもできる。あるいは、資料センター発着のバスツアーも考えられる。「東京大空襲の跡をめぐるスタディツアー」。ガイドン映像鑑賞、体験者の方のお話、館内の展示案内を経てバスツアーに出かけると、東京の地理に明るくない来館者にもいっそう分かりやすくなるのが期待できる。来館者が多い日や、イベント開催のタイミングで、1日に1ツアーあればよいだろう。

・空襲体験者の方のお話を残すために、お話の内容を声優やアナウンサーの方に代わりに語ってもらい、オーディブル化 (Audible: いわゆる「聴く読書」) することも考えられる。

このようなことを話したあとで、私たちは、「過去の戦争」の責任を「今を生きる私たち」がなぜ背負わなければならないのか、という点について話し合った。過去に起きた戦争は、戦争を起こした当時の政治的経済的支配層の責任であり、また、戦争を止めることができなかった当時の人々の責任である、との言説がある。この言説にしたがえば、今を生きる私たちは過去の戦争について何らの責任を負うものではない。戦争当時私たちは生まれていなかったのであり、その時代に生きていた人たちが責任を負うべきである。この言説について、つまり、過去を引き受けるべきかどうかについて、私たち受講生は自分たちだけで話し合った。そして、ついに話し合っていくなかで次のような結論に達した。

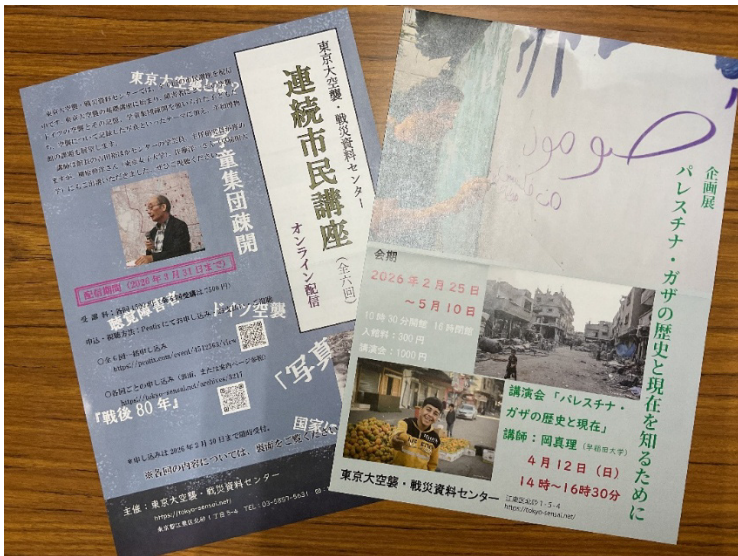
私たちは今、よりよい環境の中で生活することができている。蛇口をひねれば飲める水が出てくる。電気やガスも不自由なく使用でき、暑い夏も寒い冬もエアコンを利かせるなどして快適に暮らすことができる。道路が整備され、鉄道やバスその他の交通機関も(住む地域によって便利さの度合いに違いがあるものの)利用できる。物価高の傾向があるとはいえ、不自由なく食べ物も購入し摂取できる。これらはいずれも戦争が実際に行われていた時代には不可能だった(エアコンや自動車のように第二次世界大戦終結後に普及したものもある)。つまり、私たちは今、戦争中と比べると、格段に良い環境の中で生活している。それは、過去における先人たちの、戦争時代に生きていた先人たちの犠牲の上に成り立っている。今私たちが良い環境で生活しているのは先人のおかげであり、その「うま味」だけを受け取り、先人の過去の「過ち」を引き受けないというのは都合が良すぎる。先人の犠牲の上に成り立つ恩恵を受け取るのであれば、過ちも引き受けるべきである。ただし、引き受ける過ちについては繰り返してはならないという教訓に変えて引き受け、そしてそれを次の世代へ引き継いでいくことが、私たちには求められている。

東京大空襲・戦災資料センターを訪問し、学芸員の方や空襲体験者の方のお話を聞かせていただき、質問をさせていただいたことへのお答えやご見解をうかがい、龍谷大学に帰ってきてから、私たちは、そのように考えた。

---

<sup>9</sup> 東京大空襲・戦災資料センター YouTube 公式チャンネル

<https://www.youtube.com/@E6%9D%B1%E4%BA%AC%E5%A4%A7%E7%A9%BA%E8%A5%B2%E6%88%A6%E7%81%BD%E8%B3%87-u7k> (閲覧日 2026 年 6 月 15 日)。



東京大震災・戦災資料センターで開催されている企画のチラシ  
 私たちが訪問したときは、右のチラシに記載されている企画展が開かれていた  
 2026. 06. 20 撮影



東京大震災・戦災資料センターの展示品リスト (右)  
 東京大震災・戦災資料センター発行のニュース (左と中)  
 訪問した際にニュースを4号分いただきました  
 ご恵贈いただきありがとうございます  
 2026. 06. 20 撮影